[別紙2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 相模 あゆみ

本調査研究は、児童虐待のリスク要因としての乳幼児健診の受診・未受診を検討することを主目的として実施したものである。また、健診未受診に関連する要因の探索も併せて行い、今後の母子保健事業対策検討に資するデータを提供した。

福岡県北九州市の平成13年度1歳半健診受診者200名・未受診者200名を妊娠届けデータベースおよび住民基本台帳データベースを用いて選択し、研究対象とした。調査票は郵送配布し、後日調査会社の回収員が訪問回収を行った。主な調査項目は、父母および児の年齢、児の性別、家族構成、結婚の状態、就労状況、最終学歴、母親の抑うつ症状、母親の虐待的養育態度などである。

主要な結果は下記の通りである。

1. 属性比較では、未受診者の母親は受診群と比して①年齢が若く、また初産年齢も低いこと、②子どもの数が多いこと、③義務教育のみ修了者の割合が高いこと、④別居の割合が高いこと、⑤パートやアルバイトなど非常勤勤務者の割合が高く、無職の割合が低いこと、⑥家庭年収が低いことが明らかになった。

2. 抑うつ症状については、未受診群は受診群と比して抑うつ度が有意に高かった。母親の高い抑うつ症状は良好な母子関係の育成を阻害するのみならず、児の成人後の精神障害発症、身体的不健康の予測因子としても作用することから、家庭訪問などの際、援助者が母親の抑うつ症状を適切に評価し、抑うつ症状の緩和に焦点を当てた支援計画の作成や医療機関の紹介など、必要に応じた対策を講じることが重要であろう。

3. 未受診は受診群と比して虐待得点が有意に高く、未受診群における児童虐待リスクの高さが示唆された。また、心理的虐待やネグレクトよりは、身体的虐待のリスクが大きいこと、その中でも衝動性、攻撃性の高い行為を含む高得点の者が多く危険性が高いことなどから、児童虐待の予防、早期発見の観点からも、未受診者への積極的な支援は重要である。

4. 健診未受診の関連要因としては、子どもの数が多いことと、母親の抑うつ症状が高い

ことであった。特に 3 人以上の子どもをもつ母親は、ひとりっ子の母親と比較して、未受診傾向が約 5 倍であった。未受診者の中には、児の養育に関する負担の増大、過重な育児ストレスなど育児問題を抱えながらも、受診する余裕がない母親も多数存在することが予想されること、また、子どもの数が多いことが虐待のリスク要因として検証されていることなどから、未受診者への訪問など支援事業を通してこれらの家庭と接触を保つことで、具体的な援助の可能性を共に探ることができよう。

以上、本論文は、健診未受診者が実際に児童虐待のハイリスク群であるかどうかを検証したものである。これまで一般に未受診者がハイリスク群であるとは言われていたが、関連する研究報告はきわめて少なく、実際に比較対象群を用いて比較したのは本調査研究が初めてである。本研究結果は今後の母子保健事業施策検討の際に有益な情報を提供するものであり、学位の授与に値するものと考えられる。